



〈公開〉生と死に寄り添うⅡ

□会場 東洋英和女学院大学大学院
東京都港区六本木5-14-40
第7回：205教室／第8回：201教室

□最寄駅 六本木駅（日比谷線徒歩10分）
麻布十番駅（大江戸線徒歩5分、南北線徒歩7分）
□先着 100名様（受付開始14:10～）

□参加費 各回500円
本学院在校生・教職員無料
□事前申込み 不要

第7回連続講座

10月29日（土）

14:40-16:10（会場：205教室）

■プロフィール

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修了（文学修士）、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了（学術博士）。専門は身体表現論、舞踊学。子どもの身体表現支援、精神科入院病棟でのダンスセラピー等を実践。1998年に「みんなのダンスフィールド」を開始。年齢、性別、障害の有無等を越えて、表現を共に創る活動を地域社会で展開。お茶の水女子大学助手、学習院大学講師、本学准教授を経て2004年から現職。

■主要業績

「被災地での共創表現—このフィールドは何を問いつけているのか—」『アートミーツケア』第7号、アートミーツケア学会（共著）2016年。「表現における子どもと影—創造への対話—」『死生学年報2014』リトン、2015年。

西 洋子

（にし ひろこ）

本学人間科学部教授

被災地での共創表現

—風はつなぐ、こころは野原

内容紹介：

東日本大震災の被災地（宮城県石巻市・東松島市）での共創表現ワークショップ「てあわせ」を開始して、3年半となります。月に1度の活動は、両市であわせて65回を超えました。幼児から高齢者まで、障害のある人を含む多様な身体が集う場では、思いがけない出会いやつながりが創られていきます。言葉のない自閉症児・者や表現の制限された子どもたちは、他者とかかわり、自ら表現を楽しむようになりました。家族や市民は、活動の継続を願って、ファシリテーションを学び合っています。ワークショップ参加者の姿を映像で紹介しながら、被災地からはじまる未来をみつめてみたいと思います。

第8回連続講座

10月29日（土）

16:20-17:50（会場：201教室）

※能の実演があります

■プロフィール

ニュージャージー州立大学卒業。舞台芸術を専攻。1991年の来日以来、ベルリッツ外国語学校英語教師。1995年より喜多流シテ方大村定氏に師事、謡曲・仕舞を学ぶ。釜三夫氏に小鼓・大鼓、桜井均氏に太鼓、磯崎充彦氏に小鼓、亀井洋佑氏に大鼓を習う。ペンシルバニア州ブルームスバーグシアターアンサンブル主催の外国人のためのNoh Training Projectにて、能の音楽と小・大鼓を教えている。

■主要業績

「エッセイ 能と私」『死生学年報2015』リトン、2015。

ジェームズ・ファナー

外国語学校英語教師
喜多流能楽師大村定弟子

能作品にみる生者と死者の交流

内容紹介：

能という舞台芸術には生者と死者が交流する「夢幻能」がある。生者である「人間代表」のワキ（僧侶、臣下等）役が旅の途中で、生前の執心によってこの世に残っている死者である「亡霊」のシテ役と出会う。ワキ役とシテ役の対話でその執心の原因が明らかになる。後でそれが舞楽によって表現される。場合によって死者は生者に対して弔いを願いでる。つまり鎮魂の要請である。能は長い間、神社・寺院の影響を受けたために、生者と死者の交流には宗教儀礼的な決まりごとが残っている。しかし能が発展するに従って、生者と死者の交流のありさまが徐々に変わり、ワキ役がより重要な役割を演じるようになっていった。（共演者：釜衣代、河内孝子、John Oglevee）

〈予告〉11月19日（土）（財）国際宗教研究所・共催「生と死」研究会第15回例会

シンポジウム「生と死をめぐる地域・実践活動」

①奥野滋子「健康とは何か—地域で支え、看取るために」 ②小川有閑「死別体験のある子どもとその後」 ③高橋原「ケアの場に求められる宗教性とは何か？」（司会：渡辺和子）

お問合せ先

東洋英和女学院大学死生学研究
shiseigaku@toyoeiwa.ac.jp
03-3583-4035（fax専用）